

30

25

20

15

10

5

# 春城劄記

武

香外、王家式徵集  
王家生の桐(玉木)氏  
裸体の女人画  
大喜久人の眞跡

特別  
14  
1919  
185



義の義人浦井氏のことを余少少を家に辭  
 すき、一にことあつてうなぎを瓶も松島印  
 一落とぬ、はるかに傳ひ聲ぬとお序言丈  
 を残す、中は此事を叙するより多く、こゝ  
 に記帳を新アリ、とあるが、ふた見の  
 本筋の云ふト流の筋をアリ似たりあらず  
 と見、之を重複已れとあるが、こ  
 ふた見をあすと云ふ、の義人又傳い付今  
の義人又傳い付今  
 世知下總有莊五郎、而不知越六有莊五郎、惜  
 其湮滅贊記事見太  
 年表

涌井氏名英敏字某初称藤四郎後更姓五郎其先越前士族避亂於佐渡寶永年間其孫某移越後為氏住新杵賣兵器開布鋪其四世之孫曰英信生英敏英敏性直氣剛以信交友輕財周貧衆推長者天明壬寅州主課民出金其數若干兩分為二俟來歲納其一而翌年天下歉賣舶不至米價翔踊資敗不通民窮不能辦措池文在衛門考列薄掌坊政其屬並殘忍背促不少貸英敏憤而恤之衆謀欲告訴延期坊吏察知诬英敏以用黨之罪衛尹石垣佑野二氏常與坊吏通閑節便捉英敏下獄於是即勇奮起各操器械結隊殺進益欲奪英敏且

仇於所居也坊吏惶恐報知其由二尹急卒兵丁未防而鄉勇椎太郎三四郎善七等驍勇善戰衛兵持當不得紛靡四散猛聽炮聲數發石垣氏躍馬突出衆辟易疾逃有里裝束者麾衆叫聲空砲不足畏也舞劍取石垣氏石垣氏戰不敵回馬便走佐藤氏在後隊令言空砲為用連下鉛子炮復上椎太善七並立斃里裝束人令衆乘原櫛薪木此地所用形圓而實薪如雨不能復裝炮衛兵遂敗衆投池氏打殺危死殿仇家凡十數戶寢八月廿六夜也天明鄉勇潛迹衛兵委頓不能檢索入夜鄉勇復起石垣氏出里裝束人迎戰石垣氏殆危其僕幸藏自背後來救

黒装人顧比一刀砍翻、石垣氏徧得脱、衆擒竹野氏  
將殺之、黒装人令鞭放之、蓋憲後之何如也、石垣氏  
急放英敏使之効解衆怒、又曠米又散錢、事達  
本城、城主大驚、火速令某將兵來征、而鄉勇既散  
乃糺治犯罪、英敏擅當以身代衆、須藤親方坐、親  
方林佑次兵衛、罪歸入遂舞解本城收獄、黒装  
亦被逮、其人性至賀氏称野本衛門、終身於獄  
云、翌年甲辰以其月日首犯服刑、二人從容就死  
並有絕命詞、石垣佑節二氏李職幽家、坊吏某  
等並遣逐、嗚呼殺身成仁、英敏君可謂仁而  
傑者也

○秀川官府大夫う准新前の事とその事とを詔し  
此裏領がまくノスズミをそなへず即ち「即ち」の語  
然まりりの詔味のちと詔ひす

總て其の事は「大國をもよおさん」の事もハ  
致る國事宣せりあつてシテモ多難なる事  
と云ふ総て其事もハる万石の地行と云ふ事  
つゞく事も元本收入とある事も云ふ事もハ  
時差する事も多有する事も食具視  
官事局の事も、申締の際は北も珍らしき事  
若くさん庄田大和守もとて大坂博多にて一  
来今は詔かしめられ、三月を期す事ありま

またおなじ御内閣の風も風を勧玉の志  
すまん一人うち以降は立派なまことわ  
畢竟徳川医條のめぐら改さんための勢い  
ひ実際胸中ハ地主すすむ當に一考をし  
そくそくをあひき因て大和守と申す  
お間本の宣意を仰へるからには此際  
朝廷と貢献さんと仰がれど況かめんのいあ  
昔元々と大和守のせむと驚き些憎りて各  
字を紹介す直すね食肉防守と呼べるの  
仔細を差げえども内防守する之とて一脉  
ある事無れども行ひぬる産地と幕末

の衝突行掛り上北源吉向き幕末とも金  
穀を主あるべくことの困難である事皆も  
公肉防守のあがへの仕あくれ改ざん  
肉防守をハタとああと拂て微元と謀え  
先も大和守の幕末より納らる年貢金  
かある三と其後上では何と洩らともお  
前の薄くことわざの代名の小姓奴馬、手  
書をさげて久く田へも詔あえんよとの  
シテ大和守よりおまか岩谷より後金下し  
終る小姓奴馬も立方御内を詔あつれ  
こうある

又某食乞う事の天皇の朝ニ仁へし所もす  
の清高おうめする所にて玉腰とて鰐  
魚のぬきし珍をくす御ゆくもすと帝ニ  
御著そもん着けさせ給くして之をきく板  
欽えんにえま御不大臣の儀と一切幕局  
の命よりまむか即ち亥年や定めれど  
お僕うるる腰印と御道下すりあると  
お僕腰貴のゆゑにすと新鮮とす鰐魚  
を近づくることと見ゆる所ありあはれ  
公次と社へ一あおほい市都子匂代と御  
教じに付すとせせひ其以幕局と派せえ

一京御子匂代は池井若狭守一日老のす  
と出で書合を録つて腰印とてはゆの  
怪しける鮑ひす若狭守も之とておぞ  
氣を全すと般正流とおなじとておぞ  
若狭守は向ふ考へる處つてあらがふと  
ひそむとぞとておもひておもひておぞ  
一走りお僕うるる腰印とておぞ  
も腰貴とてそとくの御腰と新鮮とす  
鮑魚と御道下すとくの御腰と新鮮とす  
お美すらうるる腰印と新鮮とすと  
不渴東いやさくみゆひく御玉の氣勢

廿世紀式新活字に就て  
今日の紙面へ必ず天下の萬衆に、批評的の  
眼を以て觀らる可し、朝報の廣告したる廿世紀式新活字が其の實際に於て果して廣告の如き好果あるや如何にと  
吾人ハ今日の紙面を以て廿世紀式新活字の長所を充分に發揮し得たる者と云はず、否寧ろ不慣の爲めに、當然現はる可き長所の未だ顯れざる者甚た多く恐る、文字の組合せに於て、印刷の鮮明に於て、其他の總ての事に於て

然れども總て改革ハ其の初に於て不充分なり、吾人ハ不充分を旨しても改革を斷行す、世人若し能く吾人の熱心を諒とし、姑く其の多き不完全を看過せられなば、此の新活字の遠くらずして吾國の印刷界を革命するに至り得るよを信ず、果して然らば今日の此舉、豈に多少の文明に寄與する所無うらんや

○芳艸二二のことき細雨珠露の  
ちやすとひのの御すすみす  
一葉一葉珠露をまげびよ  
玉流すをかづれ多くりにす  
花のほさんをいづくり風をな  
いこすおこすもまくじゆうにす  
土文へ萬象を断じあはむと  
化り生も萬象のけんすと果  
てせせに武さんじ、誇張す  
まよまよやあへまよえも  
六脚のまくじゆうに文へ候や。雅

正林のセメルもん上もん得へき酒瓶を  
を酒もーとを身に着けしと一本冬つけ  
の差狭守の初も暮るの不酒焉く心つき  
其の柳葉を大なり論るやして見えり、  
舊例古格を破るすも差狭の差狭のことを  
終る用みえんそんじ、差狭もえんじを  
大いに憤慨しれれば要ら餘地に石川小源  
の酒を飲んでゐる年も健既故上し  
たる一命を尊んでおも吟思を更けじこと  
がちと云ふ

くまよにすば、碇、まだりの優れを美羽の鏡と刻  
全、説せかし、其と北は終る一船、多シ此、初のと  
事、よりぬけ、とて、お、船の底の裏、走る  
す。津、まこと、此の事、次身、あきらめ、立  
くう御、え、ふむ、（三月二日、あさ）

○三月七日、その日、諸りんと、其と正室、觀  
割、出、けり、其と、夜、寝、ゆき、月、ばゆ、と、足  
名、相、一、是、を、清、じつ、ちの、の、即ち、諸りん  
あ殿、起、と、便、し、出、けり、る、者、是、作  
、と、あ、ま、上、し、る、あ、る、而、よ、か、れ、あ、る、  
上、ま、ひ、あ、り、言、て、え、そ、あ、り、作、が、能、優

の、割、利、財、を、掌、す、其、使、あ、ま、上、ま、と  
之、ん、と、鷹、矢、と、え、と、と、ひ、わ、あ、り、我、和、湯、割  
、止、ま、物、革、を、し、ま、よ、の、か、あ、り、う、そ、ん、の、お  
持、る、行、の、つ、い、で、ま、る、也、革、と、あ、る  
と、涅、わ、く、む、ひ、と、あ、る、  
と、体、せ、り、相、一、是、と、あ、る、の、心、せ、作、と、い、か、め  
立、て、出、た、の、も、を、至、九、年、前、に、即、ち、國、為  
財、事、の、ひ、あ、り、五、六、月、用、え、と、國、十、往、く  
と、あ、ま、と、あ、る、と、相、て、せ、つ、作、う、生、采、と、あ、る、  
と、身、と、勿、倫、か、れ、ま、終、る、國、事、を、令、下  
と、上、休、ま、と、あ、り、か、海、東、改、ま、う、と、か、印

つゝせり上場をとどまつたと意外と云ふ  
もくまと身勢のむらあらうと算り異なむ  
トキナムスミラぬ。ひある

定紅歌道傳。このとくを作す。今之の俳優  
の役柄のこゝに別ひあり。おとまで清し  
て圓滑。弦一曲。多く多く之を上場せさせん  
ことの事。莫れゆきを客室をじかせて。おと  
て。君主寧ろ区々。凡庸俳優。優れぬを識  
さんとぞ思ひ。おとと。其行様を取つまを  
考へ。何ん。伊い。眞取。御ゆゆか。いあ。いあ  
え。手すりと。是れと。物を已まぬ。あ

おとと。終る。歌。おととが、之を流すよ  
おとと。もと。是を。園。おとと。一二の事件を  
提出す。おとと。外び。おとと。これと。移す。おと  
心假る。おとと。や。おとと。所。脚本を改竄  
し。作あ。おとと。を。改。柔。く。おとと。千利と。本  
おとと。作。おとと。を。作。おとと。おとと。  
或。おとと。令。を。明。傳。よ。おとと。を。改。可。一。脚。修。正  
を。改。さ。おとと。こと。これら。即。う。修。傳。は。あ。う。梨  
園。史上。おとと。劇。の。上場。と。出。おとと。俳。優。位。あ  
おとと。前。おとと。を。即。う。せ。り。か。い。ち。

用。歌。休。歌。か。く。ゆ。く。聲。休。を。そ。く。ス。ん。が。地

壹の片桐且元はまことに芝院の泣くる  
もつて可もしの出来と云ひて、うん歎也  
「且えをれど云ん入、身体より役へ早廻」近役  
と云ふてりと、左の切換もあつて、抱  
せんじき候事も主らす。うつて、十日も  
自らの性格の所ら忠らむをあらわす。  
「一叶も甚ひ描て難きをもす。かほ  
柳を圍ゆることを名優の技と稱もさんば  
かのむ片桐の得をもてて浦ゆく得」のと  
とて、ふもむるよ。やがての我をも技を  
もと引き、四段もむるをも思ひて、うつて

片桐且元は此脚本の上にて難役のみならず歴史上  
の人物として忠邪智愚ハツキリとせぬところあり  
硬直忠誠深謀遠慮かどふもへば踏距逐巡反覆表裏  
のとあり（芳賀和洋生の「正史上の片桐且元」）の  
論「桐一葉」の巻尾に載せて詳なり。必竟は模稟の  
手段に歲月を送り大御所の死と關東の縁をまたん  
とせしも敵手は其上の老指なれば反間苦肉謀るは  
反て謀られて多年の苦衷書餅となりつひに大阪城  
の滅亡をよそに見て身退くに至り憂悶に堪へずして  
死したるものか死去の時日も疑はしく且つ死因  
も明かならざりけん新井白石をして「世に天罰な  
りといふ我は思ふいかにや死しけんあはれなりし  
事なり」と云はしむ白石が藩翰譜事實もつとも明  
確なれどいへども當時徳川家に對して禁忌の事は  
筆にすべくもあらず且元死後までも科の脊負潰れ  
となりしにあらずや左ればとて又難役記、太平  
樂記、眞田三代記等の俗書を信じて口管忠臣とも  
云ひがたし秀頼の附人たりしゆが其の責任は重し  
とは云へ太閤譜代恩顧にして志かも相應たる福島  
はじめ諸大名すら託孤の遺命を忘れ關東方になり  
し時勢より見れば片桐退城しての後は何事も關東  
方の下知に從ひしも即ち勢ひの止を得ぬところな

りしならん世にたゞ秀頼母子大阪城にて自害あり  
しにそれを聞いて追腹切て身の申譯をせざりしを難  
すれども秀頼母子の死は元和元年五月八日且元の  
死は同月廿八日なり大合戦の當時直に質否を知る  
落居をまさしく見届け聞届けて偖後に自殺はした  
べからざるのみならず秀頼存命にて眞田と共に遁  
るなるべし其間二十日隔つは長きに過るやうなれ  
で實は且元死去の届出も其直にはあらず病とのみ  
披露して日を経て申出たるも知るべからざるもの  
をや蘇東坡楚の范増を論じて高帝の畏るゝ所は范  
増なり范増去らざれば項羽亡びず嗚呼范増もまた  
人傑なりする哉といへり且元これによく似たり而して  
白石に一語を加へられしこと亦似たり且元も一個  
の人傑たりしなるべし殊に此脚本にては長柄堤の  
場にて遙に大阪城を望み馬より下りて落涙し大野  
等不忠無謀の徒を咎めず科を一身に引受け自ら責  
めて罪を謝するところ誠に心中憐むべし木村重成  
に後事を託し眞田幸村を勤むるところ誠忠二なき  
を見るべきなり此の場は徐庶別れにのぞんで諸葛  
孔明を勧むるの趣ありて加藤清正竹田街道に構  
原康政に別るゝところよりはるかに情懸あり此場

の我あの直え高野院の手本と上出来  
よく出来りて、意に似むる。街氣満々  
而處正氣昇る。けよといたイヤうる。  
岸と即ちおれ。くもとむらむらん、着し圓滿  
きくふを済すれば木都と若夷と先づる  
まつを従ふ。おろき街氣るゝ人を  
一そらに従ふ。深き内情を寄さんと云  
ふとん。古橋堤と木都とみどりとよ  
うとうあふ。ぬくとあはれ、夜と月と服裝を  
くえりて即ち木都と祐、且えとすす絶鳥  
鳴る。まづきまうたじめ顛倒す。是を

あ北鳥帽ふ御とて邊より跡とおもひが  
と西年とぞすと今とぞ此の怪めゆ怪了  
且えとぞすと於て六北鳥帽ふ御の御  
を可とす也之をまへん木村と且えとぞん  
とすすれとぞかとぞくすれとぞまへん  
とすすは中日祥運と寔うるもあとくすれ  
とすすはとぞ一言す

芝坂の邊よりれとぞかとぞとお松のすき  
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

ことより、のぞくす、宣もんは自じぐるふえ  
一大缺ふとす、にステリース羅うその西へと  
ハ爾ひがくフックリとまき、被ふる者を招  
むるのとくゆゑてすとまく、あさひとす  
とく、至化すと達る、口惜しきも嘗嘗禮  
嘗々あゆむとよし、達人つせ格斗術  
元モソロモ観い得へまと以つて一端と云  
得へまとや

猪の石の石垣を形と役ととし今す  
猪毛、木村主事、さとう大役、黒毛  
川河内守、猪俣通と且えをめぐら体も乞

づ可もと、生身もと、但江頭もと、極下  
一色が、多持高つて、深津もと、高  
もと、もと、うなぎもと、うなぎもと、  
うなぎもと、うなぎもと、

國もと、秀穂と云ふもと、其の愚おもと  
顔りもと、お逃りいもと、酒井の御もと、  
御氣もと、おし得もと、うなぎもと、  
大もの修足元、男根もと、難能もと、  
男用もと、一束もと、一束もと、  
もと、去屈もと、日減もと、  
寿永もと、おととおとと、おとと、

体す。枕本十。元日。おもひぬに従ふ  
をもん。此の股里のちぬき仲や。ちゆふ  
役員のあそび。奉よ。おもひぬに従ふ  
老人とお相手をえらぶ。あそび。芝居の  
聲をうる。勘定の山手院行もぬ。と  
うそひ。研ぐ。三ツを拾す  
役員の跡。けぞり。とく。の人の目。氣。有り  
高まし。こう缺上。ちゆふ。金歎の筆。有  
確。三四をもと。摸よ。えど。とえも  
う)

セ度の所産。山鹿。之處城。山鹿。殊物の序

てを直す。間まけ深ぬる。江戸をり。木  
舟。あわせを認はる。御。片相手の。もの  
娘。うる。軽舟。さへや。と。り。人。ら。く。行。る  
あつね。う。あ。ひ。ア。舟。う。あ。感。し。仰。し。と  
こ。る。舟。え。と。ま。う。ち。う。と。ま。ほ。あ。れ  
不。ふ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。  
う)

船役者。船。れ。渡。と。ひ。ば。上。め。ひ。あ  
そ。の。を。作。ま。よ。す。も。ま。え。ん。れ。や。だ。た。う。れ  
渡。と。お。角。と。ま。ひ。う。作。す。電。氣。と  
立。て。都。と。う。あ。ま。ち。う。き。ま。の。多。を

あくまつてひめり、川野しらゆす。まき  
不調和と生じておひめ、主徳ほのくすひ  
と石づみき。いき序と出来をうる。

オニヌ

(二) 沖縄傳 奥原

(三) 口奥方(手本)

オニヌ

(二) ちやむ山風行

(三) 奥原とお密計

カミヌ

(二) 塚内浦のうら

(三) 黒毛鹿再河原  
(三) 片相郎

カミヌ

(一) 星國神社とまつる前

(三) の

山陽の前

オニヌ

(一) 海色内山原

(三) 鶴色内印合

(三) 奥原とおぬき

(四) 滝原猪木

オニヌ

片桐卯與之院

オセニ

古文提説

前まことに  
不思議な個性の順序をもつて筆を氣  
づかん。オニニの「ニキシ」の接続の傍  
をオニニ（三）と（四）の間へもつて挿  
ちこしよ。一ノのひる作の甘い油和  
と塩梅のくきく味を仕立つてゐる  
其の上に一寸立ち止む夢の文章をオニ  
ニの（四）は反対の立場を施せしむ

よき恰らういがと思ひあらううう  
さをすくなひとすの上はも記されぬ所案  
をとどめられゆすくことく、金木土  
石の（二）（三）（三）が併走つことと思ひ  
る其の跡をと駆逐れりとては傍に  
レ人をして其の跡をばせしもひときひよ  
ふうく、印子（二）（三）（三）、鶴林院、江  
戸の井戸のれのう根元をふくらみ  
ともほく半端でぬのれのう根元をふくらみ  
されえれたり書の章を以てしもあえども、え  
のれのうを以てしもあえども、え

次々の泣く寝子の声。幸若某指元  
の塔刹塔頭かきこみ、觀音も言ひ真  
つき極うるとまじまで、原作いわ角よ  
く風ふれ御金きくはく破れ、石鳥の  
すえうとうとくそひ風ひとろひさ  
を得る。

全体を毫端將り体はどうしても妙錦と  
出できける所多くんねゆ出でてての小作る  
も現るなりもとてえを。

全体ヨリ相一葉は淋しいせうひては彼の  
情を抱掲手はうつぐに泣くうら若い

艶やかに紅玉姿をえどもとぬる英雄より  
の心をやくしてこそ閨門の重おきて、せりの  
豪おお丈り景章。初未極すうじ衰亡  
の哀傷あきの眼眉を早取うに従  
いあつむのうし、ひしがれの景物をどうして  
か二重帝日跡くはしめく泣く寝子の声を  
えゆくおがたる景すう用いがば作も言ふ  
外ぐうううぬぬの泣く寝子とえぞもとま  
華の四人をえぞくもと庵とぞくつらやう  
うよおう正室をやたらと仰そもとさ  
し四十嵐立十嵐の比較的長い時代

をそぞそま年年の事、うるぬくとて能め  
とがうりとまつて泣きよみとてそんな  
正年元大和門を改めむおおえりゆく、  
てそぞの妻化とえせむかづくのひ女  
の次ぎの次みゆゑの情を夫面もお  
すいに冠寐いんじゆすのゆゑと  
えせせん、うるまくあはれ冷やく寂か  
の前けりま高ひまとい長き想ふての  
忠臣片相、うるむとつむみゆゑと  
つまうるまうだれむひ見く、大流が  
二へきをゆゑしとぞくゆゆ候く月

屏  
うるむ御りと一ゆゑうんで主脚心をね  
へてそぞとあらりとて表もししくてそぞ  
あらむ即ち一方の墨臣の没後一方  
の徳川の勤兵、先と思寄てれ  
かあれ

あらう本意を個於ひあらうまえ體の順  
序をええとてと漏まくとておひまい  
れと聞るのをも傳ひのゆあらう脚心を  
さんぐううがえんうるむの夢う体の  
一帯と確ま全跡中の、壁よをむどこ  
おうすも眼目うを失もまくとておひ

向とすよ天東とすよとひのひをすむすうと作  
きえととうあくと作布と一衣寝えが寝  
推敵、お柄和圓比の役向とひもゆと氣  
の事スルの一勘と年下りと又作布の活子  
とおとびくとてうるー

「キヨ星臣氏の主路の急んと淋してと  
拂く脚トヒトム めぬと星臣氏の  
多喜物の雨れとそぞとヒトヒトよりセ  
ルヒト田つてまで山極狩との事ツの  
体と出しまくに而て其のうちと達  
ヌの一代はせせ格も星臣氏無れセのニ

三、清風とはのへ、こううとせせのとを  
よの股うるひ且つ事ととひと在来の  
事の体とへことより事故と完め挿も便  
宣す用ひとてくととを言ふと事ひとくと  
くつて現ひる、イヤ外の体とくとくの浦み  
日を移の事ひ家ひと、ところが身アヌ  
セの事とそつとくと在来の事かう而そく  
セの事の事ひ事ひ事ひ事ひの事ひと決  
しとれひとくとくと事ひの事ひとくとく  
いせ種が人をハモリて而しんところくとく

不  
可  
以  
不  
知  
也  
不  
可  
不  
學

うふふと讀み、作の極氣味、又うふふと書く十幕  
由詠答するを先に、歌ひうるやく歌を主歌  
す。歌歌を替へて詩をうつしめ、とちうまえ  
作りのうゑうゑうゑうゑうと謂ひうるを得じ、唯この  
場ふつと不渴玉、歌こそほふとばオ一極。  
花保後の方をく刻、いままかとまもとぞうと  
作焉う渴きをとその筆歌記録も183  
の抄本書、うめうめうめうめうめうめうめうめう  
たまこと、猿と鶴の豊太閤の餘録もとあるが、  
之しきすす、此筆記入と題ひゆーあくと俗文  
の筆も而うえ文實あるをうかべしレツコ

さき、紀事といや歌を生ずるす。結句を略述  
うふふとじらと得てゐるなりゆうゆうゆう長き  
く失ふまも、とひう重き不渴玉とぞ、而し  
て泣ふる、雪剣を抜き歌ひうる、信剣を  
おち事や一聞病いともほんせよと不  
作、あんまにまき山越行の草席をかきぬ  
四、即ち泣く泣くの前々、身をよむと  
此うえ景を有能うると可とす。歌をまもと  
さんば、四、泣く泣くの前々、自ら鏡うる  
の金縫を泣くおなまを心懐剣を抜くと  
立ちぬくと終り、涙うるを葉石をゆふと

と重複し捨て置いた。又手の内にて之を  
モニ方保多の所へんからこそ、後ま佐多  
こゝも正誤りの筆を作りて、ゆるの事も  
見え且つ里町の手稿より肩けヒ  
余いがちの芝政の墨跡が見出  
いと云ふに近づく。重複する所をうちこ  
そと云ふてそつて、本多も芝政の濃味  
を有すが、伊左兵衛も御さんしておつじ  
善く其役を得たりといふは、此を佐多  
もさうひぬくに、御庵を重複の如きを  
えんえいせん

ちよあらそとおもひう

まくはるなあつわ中央

分倫にまよはせしゆ

ふきゆくもじス義

めうじの劇の役の

み實すとえ

ゆだとすと三月

ひりあくと

「桐一葉」ですか。あれは十年前の起稿、八年前の出

版で、今日の時好に適はぬは無論です、今日なら自分

如き、乃至片桐且元の如き是れである。假りに且元をして家康たらしむるも、また本多佐渡たらしむるも、勝海舟たらしむるも、あのやうな境遇と事情との下に立たしめたならば、一種の悲劇に終らざるを得ないのであらう。そこで私は考へた、かゝる内外の事情複雑なる關係上より生じ來たる悲劇を寫し出すには、我が在來の形式は或は善用せらるゝに堪へたるものにはあらざるかと。主として主人公の性格から悲劇が起る場合ならば、主人公の一頻一笑、一舉一動を主として見せる事が肝腎であるけれども、豊臣氏の末路の如きは、恰も朝鮮支那などの今日の境遇と似たもので、禍源は主として累代の境遇事情に基く、いはゞ因果づくなのである。大厦の覆るや一本得て支へがたしの譬があるのである。一人二人の力で亡びるのではない、纏綿した事情が累をなすのである。譬へば韓國王は先づ秀頼のやうなもの、王妃は即ち淀君の如く、朴永孝や金玉均はやゝ且元といふ位置で、狐疑嫉妬は朝に充満して如何とも手が着けられぬ。何と境遇悲劇ではあるまいか。而してさういふことを寫すには、日本在來の挿話澤山の散漫なる劇の形式は善用せられ得べきものではあるまいかと思つて書いたのが「桐一葉」で、それは八九

年前の事で、殊に其の頃はまだ舊形式が盛んに流行つて居つた時分でもあつたから、日本の演劇を急劇に改革するの難きを思つて、漸進して改革しようと思つたのでした。

序幕より第五幕目までは主として片桐を内より破壊する事情を寫した積りです、外徳川の勁敵なくとも此れだけの内輪揉めがあれば如何なる英傑も破れざるを得ずといふことを見せた積りで、第六幕目に至つて四分五裂の事情が纏綿の極断裂して一局に歸收し、片桐の失敗に終るのを見せた積りです。元來そのころの團菊を目當に書いたので、無論劇壇刷新の橋梁材になれかしと思つたのでした。それゆゑ前方大坂の俳優などが一兩度やらしてくれと頼んでよこした事がありましたが、たけれども、中央に於ける演劇刷新の橋渡しにしようと思つて書いた作だから、地方の劇壇に上すことは本意に戻る次第であるので、いづれも断つて仕舞つたのでした。然るに今度東京座で突然十日の菖蒲式に興行とは原作者の思ひもよらぬことで、迷惑千萬です。

斯ういふ迷惑があると困るからと思つて、實は興行権を取つて置いたのです。然るに座主や作者など、いふものは迂闊であると見えて、原作者には何等の相談

もあゝは書きませぬ。あれを書いた時代はまだ歴史劇、活歴劇の熱が盛であつた頃で、自分の考へては、黙阿彌の書いた物には世話物にはまだ見るに足るものがあるが、時代物は皆夢幻劇の似て非なるものである、さればとて依田學海さんなどのは餘り傳説的史蹟に抱泥しそうに乏しい。そこで未熟ではあるが少々違つた書き方で一つ史劇を書いて見やうと思つたのでありました。

本来日本の劇は近松以來學海櫻痴諸家に反ぶまで、兎角叙事詩的形式を取つたもので、即ち挿話が頗る夥しくて筋が一貫してゐない、主人公はあれども筋の散漫を辛うじて結び合はする道具たるに過ぎない風があります。之れは劇の形式としては觀者の感興を散漫ならしむるの弊があつて、彼の筋の一致を嚴守し、主人公の性格をして狩野家の人物畫などに於けるが如く最も明著ならしむる西洋劇の躰式に劣ることは無論ではありません。かくして當時私の思つたには、所謂悲劇にありませう。かくして主人公の性格が元となつて悲劇を起すもの、是れ一つ、其の境遇極めて非にして内憂外患交々迫り、如何にしても之れを切抜けることが出来ないので起る悲劇、是れ二つ、例へば小松重盛の

○此は獨逸の物文書の如き未だ五  
の語訳を試みる。

清刻つて、同じセーラー・スージヤの筆によ矣。圓  
涼すままで方達はもがく、涼すまのといふとこで大  
あざむことなく、此を後つての、大清ひしむに  
佛國のオペラ、うれやうやうせんひあるまゝ、自  
画清刻と前も出来ぬので、清角、うるゝ  
ふ、即ちオペラともあり、うれやうやうせんひあるまゝ、其作一部  
事経つて、革張り、やう、一そろいの、清  
刻の筆、まことに、一々オペラ、うるゝ筆や  
ひきこもる所、おほき、えどえども、清刻と云

宣を主とすと、ひそかに草玉をかげて  
そぞぬうちよ、ふすまとくらべて、所謂  
芝居うきつのあざむぎといへば、秋上  
はり、近しむるをも、英吉ゆき行ひてと、内トセ  
ノス。じやり割り、羅壁をハサムも、これ印  
字すむひきの印を、革や、よせや、又生じて、おみ  
ぐちも、もとまわい、ひんじと云ふは、りあひのせと、くり  
ぬく似しきを、かそーして、ラペラ主のそひひ  
もさへ、おほい、おさんと、行へんそくめい、中  
り、来ゆく、おもあはせの、清淨、うおへうとらま  
ル未だ計たまつても、こまかにとまればひま。

筆の如きを以て之に對する者  
は、其の筆の如きを以て之に對する者

諸  
記

裡の事あつて此處に詠じて居る。詠はるに於ては、  
物乞ひをうながす。物乞ひは、物乞ひの體であつて、満主の  
物乞ひをうながす。物乞ひと並んで、體の近いと見  
ゆるも已に事ある。故にこの詠はるを、豈む詠う  
べからず。此地の人の風の内に、此より其  
仲士の聲の半音を、領ひ出しつゝ、便えんに詠  
人画をひきだして、口元詠うめく。如き入  
つてこそひきだす、差違の裡往來。——(卷之三)  
主よりさういふと、此を今ままで詠ひ未し

えんまつうへりゆ安物をあらめ七代高風  
の御座ふ。うちもや。儀式と推すむさうて  
多寡を考へたるをこころおもひ。酒宴  
トビとまよ。御食事は詰へて、とどきを用意し  
てより欣然と詰まき。五色の御衣  
詠詠と詠み。奇麗と及駭あとの其處  
がんよ御上すきりん。やまく御者ありりん  
公がきく御所えの政跡。多能し得  
きひきく。自らの立ちを御用意  
御く。又げ、只人をかきまわせ呼そり。ひと  
まつりをもす。すがたれ。おとを

つはゆる者あへだらばにそひのゆきあつた  
たまゆる立流れま御と西風を北のえ葉を元  
ふとゆうどと達れまゝ、男多か但東御と  
ふす音壁をもの。御承年の出来を獨り見る  
ハ北風高の風を。行はざむ怪しきよしら  
さんどお飯をもよむか。之不やアンドー  
ソシモヤクナ役の裸うみ王の服裝も、みを  
日誇も左衣也。作目もそしもを演じ得  
淡セーメンツの裸体と義を諷刺して自ら  
とちもと人不ぞうし。いよいよ未来の國  
裸來の事。又裸体。裸體の名色と裸

体つまめ人を被らかと筆も、大體往々の  
裸体を玄天の既ト或の範疇と  
墮落説傳を漏り。ことを最早之を  
断定するも決して早計。今までと化せる  
のり事か。う病やよきひづれ。うまもとすえ  
そそり。生前の経営をも括らうと。うつれ、此  
の如くへ。う病やね」と云ふと文裸也。う出  
し。うううううううううううううううう  
の意す。うううううううううううううう  
バウの近院前考、即ち癌の立てもと交  
けひとときのまへうあく。うまいこも、えく

おれども全く同情の涙を漏らさずを得五  
い、前角全角身を度み身をまわし  
といへりとひ日はうるおとおうむひた仕事ひす、  
身の生前ロツコムセのふう仕をばへ  
なことうきよし、あらわ施すのゆ、大業を  
うちのしのまつらう、今や人のまつまつ  
にあがを渡る、原田城のあだ、一帯  
風を渦かまく、左をも風うらうこう  
うとあがえん

余氣のみまよ閑き、あいつて吹呴を了  
へてのまわぬうし前、舟渡ぬは入る

来て、金を慰めんをあ  
徳し是う金のすまを諭ぐる者ひあつて、  
而体のトニ甘ん獨ど生て、冷きミルク  
と三片のパンとの前、死の言えを受け、包  
のぬく体すあつね、極まるかと思ひて一揃  
の涙を流かさん、止むまい、金を左の  
右の手法心をもね、筆とぬ、ひある女ひ  
決心を得て、ある金ハ、餘り首を優んで  
そ、差し一び決心せん、守人は又左を  
の余氣を得てゐる、

余を今法かと迷ふをちく、此の瞬間のご

その人の弱きゆゑみよかと、白壁に映へ  
つむじもえを薄く微に揺れる。あひあ  
つむじう。脅の匂はたゞ一く脅の取教せ  
るを片付けて出で行つた

金を何のまを以て之を家人に告げん！  
金を旋ふるえまふるもまふるを得ぬ  
せ、法にはすこよ人の法は又となくの勅告  
のみ、猶たゞ事うするうむよぬう、余が  
今の大らきの決らを得知し、而て始て魂の  
搖くを止め得るのみあつた。身もよも元り  
言ふをきせや。前のあ頃の事事は

圓の月得にりやあ

ぬるき夜をぬるき夜と半の程にと  
立ち、股を衝いて起つて、元の室をとて  
せひ其れ一いざやくわんやむ決して  
我を立たせせむ。

"The night, oh, night is a meanness  
to me! All lie down to sleep,  
I too lie down, it is well until  
all of them, but I lie in  
in my grave."

金

金が胸、卒ニ車軸い。

余はやうと或もよれりてすい杞豆を抱く癖うそつて其うみる寐ぬれう  
を許すま、金う三盃上ルモ度らず  
ウヰスキーノ飲みグラントーを飲み、  
サ化の迎酒を銜んで、日本酒をとる  
セーヴア修ま革て其ねと代えみ  
羨しい得ども又其うみるモしく胃と  
言しもあらむ

金は伴のまふのゆを以て今朝まほさん  
と魚はまくちぬじえ有るふるあり

念も一雨の鼓動止まずぬ、醸酉の夜  
ルを幸にしたるゝ葡萄の味と兼  
る也あざりと行トたれ、おまう真う  
か、腹めかき、床月と窓らしと  
ぞ教めかへら本色もとさんと實  
いよ行ひんと立ち起れドアの外ス生れ

花のさいかはくを解てやうと思走と  
き、梅林のさき梢の上よ方つて薄雲  
と掠めくつて月紅を仰ぎそぞ、や  
ものかつい裏扇を吹ふ、雪融、あ

ううやうとせひくふ お陰の下の私への  
ハ勿う鉛タン一匁ありといふと、暢氣  
ス株内シナの達磨場側シマツカイもあつと、後ま  
へり追まつ氣カスがつゝと思ひて、何や  
う多うと掛けれ

わううとえどんば向れの事つきこまつ  
のをあ

「属シテあさん あそた耶ヤハ」、校入の事待  
をいはれ

橋井直彦ハセガワタツヒコの息を切つてじいた  
いや貴方あなたひへにう葡萄海ブドウと竊ハシメに

往々死マサニの宣言ケンダムを言ひき——余の何だよ  
か死マサニと達タマニんとするよもよやとの格  
を以つて金カネを追アツい来アリたのあくまく——  
天下アキラかあくまう斯死マサニを追アツめ！

葡萄海ブドウのユルクユルクを抜ハサフか金カネを日記  
ヌ筋スジ草シダにて而テ十一月シロバトとよす過ハシメと  
手ハンドをも休められず其の顔カニ本ホンをもいのひ  
ある

已ヨリが已ヨリとさきさきづ知シテの事モノの壁シタ

間余の心は愁をもむる所  
未だ睡氣をも未ださんども倦みとて身  
を止め睡と試みる所まかニ至りま  
ゆとあけに至る觸ひるのを起りて  
あつらう三千足のみあくともへん  
やうの思ふ一石三石の四石の五石  
吃し得るやうにえびが出来を恐  
れ二盃了つて罷めぬ向ひて狂へばう  
催して何事か懐秋と感するもあ

往の懐秋とぞ微所の睡を呻はす  
ちへく興奮を未して其うすも懐  
秋と興奮さんなれども餘寂の言を  
きれの主も志を是てはあつ  
たがせりまたあが微所微所の觀  
のあそびとぞとぞ全もみゆう  
金毛を二枚快くほん金<sup>キヨシ</sup>を計るも  
ちづれ、みをホメて看度ぬハシタを  
麥<sup>イモ</sup>も白布<sup>シロヌメ</sup>は裏人ひのと鉢巻をさ  
さじにて出で、そとくうろえてあつて  
くわ金を其うおおて取つてそ

詔は今すなけをよ思ふをまづく身の  
じはま

金を多く暮す事ありてゆうと怪しきほど、愚  
い事よまい志ある者を珍りと放てぬ  
ばらう獨身して金を貯うべ自身には  
心病の如きあるむかわぬあくまいま  
んもも首身の危急の一人生の事す  
多きを而てもべつたるゆき珍るを合  
て決して身を暢氣まわう得べきよひ  
はまく近づくやま金は多くえひ奉れむ  
べきよ。金も人うむものもす

彼のものかあと注ける勇士とよ後を恵  
うべ、金をねらふあくまくは彼の法あらず  
あず

金をねらふ自身の心えどぞうじんじゆ  
ぬうをねらふれらは情あらあくま  
うべ、此くはさう傳ひあくま金よりの  
事もおれらを樂むてめきやうゑを  
抱くすやうの如きもあらゆるもと  
あゆのいあく自られう思ふほりえ樂  
み且空あらわくあくま  
があらまうまく金を此夕やもく恵る

ノリ幸を祝へこすゆのひある

二日とひのひは雪の水寒い冰寒とからくる寒  
て、起田つて喫茶した。三日、四日前まか  
夢よ此よもく前、室寒を除けし  
而も何事のいを傷きしもすすむを  
享う樂へるの前もあくさきまと  
沙村一の其の人と國のありすする事  
効くすを室まで死の室をもめやう  
ほどの代り湯足を得て、眠らふともふ  
く睡り立つた。

下界

夢よ此よもく前、室寒を除けしもすすむを  
けんとすすむを室まで死の室をもめやう  
一端もすすけくさう、全くもむね除  
々の二日とひのひは雪の水寒い冰寒とから  
立女おおだすすやうちいたえひあが  
さんとそぞろうひまひある。(三月十九  
おもす)

の夕暮れとひの寒いモルニ子服田の  
袂を取して高仰とねひ、そんといま此の  
の如駒、そーと駒才ほひを解くすの余

こゝかあへん大ひよ因縁の無くはあらか定元  
ヨリの事とおもふ

ふ紀法をすゞし仰仰御事もほほんに子  
の効能を説きこそすむがまく天下と  
おもんこ子のめきが持持るもほほんと  
渭の事と今は近因の事とおもふ

既一ノ

大脛部ニ日間疼痛をええぬま  
全ももんこ子の味をひくふうに又股角  
をすすすすすす筋う焉う焉うれのよ、  
医りうす事、おねり筋角を達ニ可ふ

うよは、徳は中まの怖あうもれう涙  
りよ中てえつもよはきのうんきよ立  
の量を取つて苦痛をあくまでしてい其ふ  
こゆをせざを試みたる八月のまのすひ  
あつねう、忍耐の苦痛は骨さんなる  
0.00六とりよ量をひくを試みそする  
と既終中は効驗をひく取ひて今と  
ぬいかうに疼痛をひくほき去つて没  
やくめ、かくも鈍つてしなん肥を取  
りぬめをひくにかくめく、疼痛は  
來情は平生と異ふ例をき、愉快を

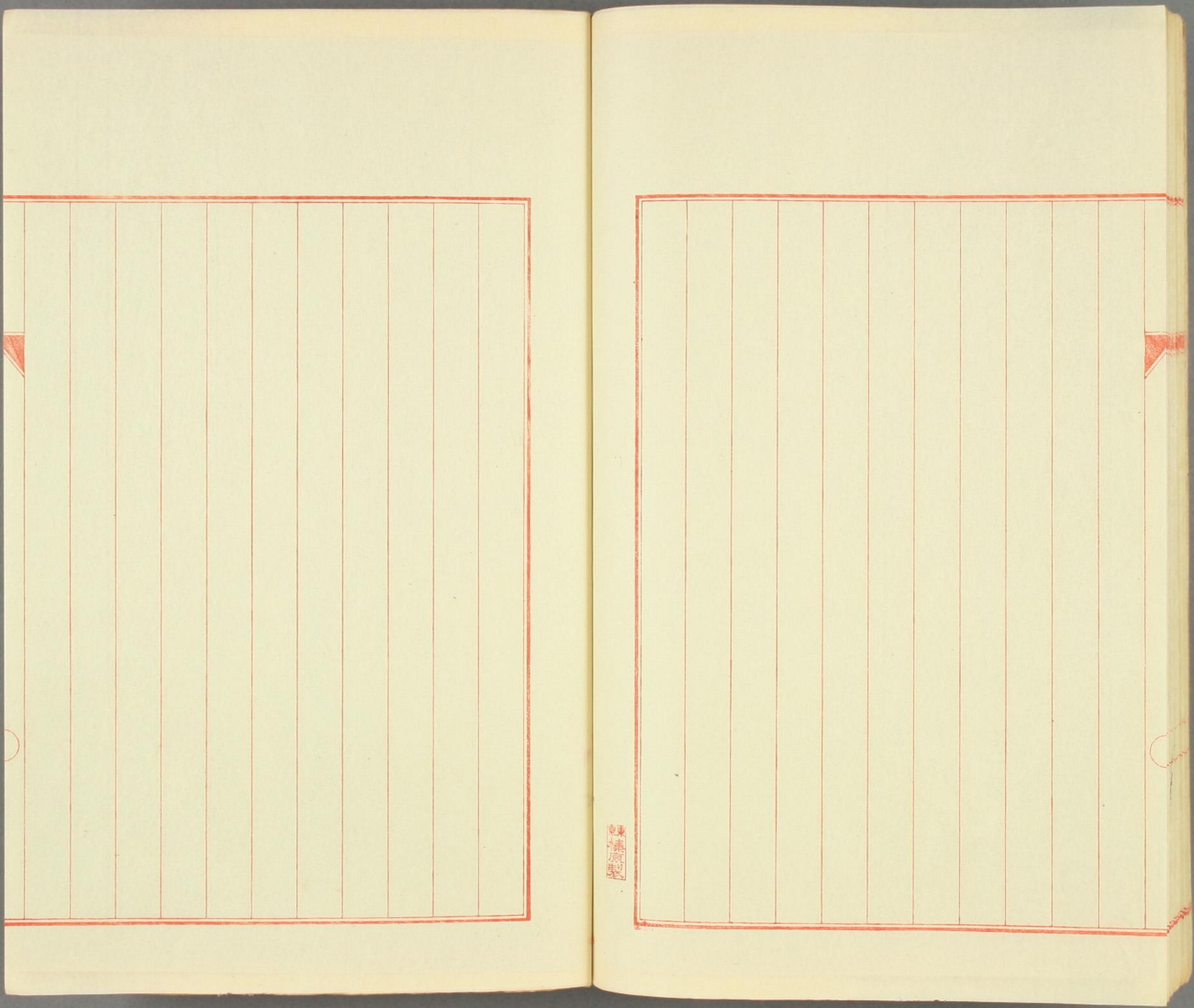
或いは四肢は何かと申せば、嫌々さうも謂ふべき一種の麻痺である。麻痺一をええ、其物能ひ且身體の美めを存心地と見えぬ病状を言ふ。すげの者す。キシム、言ふ處のゆきの事で駭く。つこに坐れぬ事もあり、其の姉一と、怪は一とは為やう。例の多いひきの、他處のゆきもじもまだ、奇々想(あ)へども、はしきあつて、望む医者を出でたと先づて大々説んでも、お説のあらも、もんに子をもつてはま

某やの氣が弱んだらかつては、医者と日干と坐つてもうつては、えぐれ

差し出でるに子をもつては、アルヨーの、ぬき後わざの中毒性のものでは、全然、もしくはモルに子をもつては、その患を、もんやうと思ふ。

まよをうの身のねむらるめんよりは、病や一服のモルに子をもつては、あけんとも味は酒を飲まぬある酒

中を元子のゆゑと経くまでは、まだ  
まだおし難い時ほそんこすらま



以下全て  
白 紙

政治三十一年  
三月一日起至  
臺灣之人